

報告 一

武人・武官と文学

宋代以降、一般に文を書くのは知識人であり、彼らは科挙官僚、もしくはそれを目指す人々であった。当然歴史書などの記録は文官の視点から書かれている。

しかし、「文武百官」というように、政府を構成するのは文官だけではなく、おびただしい数の武官が存在した。同一の事実でも、彼らの立場からは全く異なるものとして見えてくるはずである。

一、明の武宗正徳帝に対する評価

明の第十一代皇帝である武宗正徳帝（在位一五〇五〜一五二一）は、皇帝でありながら戦争マニアとして自身を將軍に任命するなど、奇異な皇帝の多い暗君として評価されるのが常である。『明史』卷十六「武宗紀」の論贊には次のようにいう。

明自正統以來、國勢淒弱。毅皇手除逆瑾、躬禦邊寇、奮然欲以武功自雄。然耽樂嬉遊、暱近羣小、至自署官號、冠履之分蕩然矣。猶幸用人之柄躬自操持、而秉鈞諸臣補苴匡救、是以朝綱紊亂、而不底於危亡。假使承孝宗之遺澤、制節謹度、有中主之

操、則國泰而名完、豈至重後人之訾議哉。

明は正統以降国力が弱まった。武宗は自身の手で劉瑾を排除し、自ら辺境防衛にあたり、奮起して武功により力を示そうとした。しかし快樂にふけて遊びにおぼれ、小人どもを寵愛し、自らを將軍に任命するに至って、上下の区別が消滅してしまつた。それでも幸い人事権は自身が保持し続け、政務に預かる臣下たちが輔佐し正したので、朝廷の紀綱は乱れたものの、滅亡の危機には至らなかったのである。もし孝宗の遺産を受け継ぎ、節制謹慎の態度をとって、中程度の君主なみの身の処し方を保持していれば、国も安泰で名声も損なわれることはなく、後世の人から批判されるようなことになるはずもなかったのである。

このように、武人や役者を重んじて政治を混乱させたという評価が一般的である。しかし、文官から軽視されていた武人や、社会的差別を受けていた役者の目から見れば、武宗は彼らを優遇し、皇帝が宮中に籠もって出てこない明代中期以降の状況にありながら、自ら外に出て、武人たちとともに行動する理想的な皇帝だったはずで

小松 謙

ある。

実際、演劇・藝能における武宗の姿は、史書とは全く異なるものである。まず蒲松齡の『聊齋俚曲集』「増補幸雲曲」を見よう。この作品の成立過程は不明だが、「増補」と題することから考えて、おそらく民間の藝能に基づいて蒲松齡が作ったものと思われる。

この作品における武宗は「上殿嬾整君王事、諸般技藝都學全、萬里江山他不戀（朝廷に出ても君王の仕事をする気になれぬが、あらゆる藝をすべて身につけ、天下を治める地位などには執着せぬ）」とあるように、政治には関心がないものの、あらゆる技能を身につけた超人的能力の持ち主である。宮中を飛び出した武宗は、途中で庶民のために人助けをしながら大同に着き、妓楼で野暮な男のふりをしつつ、あらゆる藝を身につけた能力を発揮して、兵部尚書の息子であることをかさに着て色男ぶりをひけらかす王龍を打ち負かすという物語である。つまりここでは武宗は、貴人が民間人に変装して各地を回り、庶民と親しんで、悪い権力者をこらしめるといふ、日本にも類例の多いキャラクターであることになる。

更にもう一例、上演頻度の高い人気演目である京劇「梅龍鎮（遊龍戲鳳）」を見てみよう。これは、武宗が大同で旅館の娘李鳳姐を誘惑する芝居として、かつては上演禁止演目であった。しかしよく見ると、武宗は否定的に描かれておらず、二人の関係は真面目なものである。この芝居は二人が関係を結ぶところで終わるが、後の展開は、武宗が李鳳姐を妃にしようとするが、居庸関で四天王を見ておびえた鳳姐が病に倒れ、折しも寧王の反乱が勃発したため、武宗は心を残しつつ出征し、死んだ鳳姐が武宗の夢枕に立つという恋愛物語になっている。また、劇中に軍人が悪い待遇を受けていること

への同情の言葉がある。

こうした武宗伝説の成立時期は確定できないが、明の遺民だった杜濬（一六一一～一六八七）に「聽韓生說武宗平話」という詩（『變雅堂詩集』巻九）があることから考えて、少なくとも明末清初には武宗は藝能の題材であったものと考えられる。

藝能の世界では、武宗は政治に関心こそないものの、庶民と気軽に交わる超人的能力を持った風流人であった。つまり、藝能の世界と歴史書は、異なる価値基準を持つのである。

二、藝能と武官・武人

古来藝能は軍隊と密接な関わりを持つ²⁰。

南宋における最も主たる藝能の場であった臨安の瓦舍は、殿前都指揮使楊存中が配下の西北出身軍士の娯楽の場として設置したものであり、殿前司が管轄していた²¹。そして南宋・元における商業出版の中心であった建陽の書坊は、「平話」などの素材を臨安の瓦舍から得ていた可能性が高い。明代前半は不景気のため出版は不活発であり、建陽のみで商業出版物が刊行される状況であった²²。

白話文学は藝能と元来深い関わりを持ち、建陽で成長した。つまり白話文学は、本質的に武人と密接な関わりを持っていたのではないか。

元代にはモンゴル人・色目人や漢人武人が権力を持ち、白話による文書行政の実施とあわせて、おそらく彼らを主たる対象に白話文学作品が刊行される²³。武人・武官は白話文学作品刊行において当初

から想定されていた主たる読者であり、明代には『水滸傳』郭武定本の刊行に見られるように、刊行者・制作者にもなる。

武人が白話文学もしくは藝能の創作者となったことを具体的に示す事例としては、『四庫全書總目提要』卷五十四「雜史類存目三」の『平播始末』の提要に見える次の事例がある。⁵¹

萬曆間、播州宣慰使楊應龍叛。子章方巡撫貴州、被命與李化龍同討平之。化龍有『平播全書』、備錄前後進剿機宜。子章亦嘗有『黔記』、頗載其事。晚年退休家居、聞一二武弁造作平話、左袒化龍、飾張功績、多乖事實。乃倣紀事本末之例、以諸奏疏稍加詮次、復爲此書、以辨其誣。

萬曆年間に播州宣慰使楊應龍が反乱を起こした。郭子章はそのときちょうど貴州巡撫で、命を受けて李化龍とともにこれを平定した。化龍は『平播全書』を著して、前後の平定の状況を詳細に記録している。子章もこれ以前に『黔記』を著して、そのことをかなり詳しく記したことがあった。晩年引退して故郷で暮らしていたが、一、二の武官が「平話」をこしらえて、化龍に肩入れし、その功績を誇張していて、事実と異なる点が多かった。そこで、紀事本末のスタイルにならって、上奏文などに多少順序づけをし、改めてこの書を作って、欺瞞を暴いたのである。

郭子章（二五四二〜一六一八）は、隆慶四年（二五七〇）の進士。名判官として『郭青螺六省聽訟錄新民公案』の主人公となり、また『劍記』『馬記』のような編集物を含む多くの著書を刊行した人物であり、自身出版と関わりを持っていったものと思われる。

ここでいう「平話」が藝能であるか、小説であるかは確定しがた

いが、状況から見て小説である可能性の方が高そうに思われる（現存する『征播奏捷傳通俗演義』を指すとする見解もある）。これは、「武弁」、つまり武官が政治的宣伝の意図を持って小説を創作した事例となる。

また、『楊家府世代忠勇通俗演義傳』第八卷。

若以理論 非臣等負朝廷、乃朝廷負臣家也。……聖主不明、詞章之臣密邇親信、枕戈之士遠隔情疎、不得自達。讒言一入、臣等性命須臾懸于刀頭。此時聖主未嘗少思臣等交兵爭鬪之苦而加矜卹。

理を申しますなら、私たちが朝廷に背いたのではなく、実は朝廷が私の家に背いたのです。……陛下はご聡明とはいえず、文官は身近にあつて信頼されており、武人は遠く隔たつていて親しみもなく、自分の立場を伝えることもできません。ひとたび讒言が入ると、私どもの命はあつという間に刀の先に掛けられてしまうのです。この時陛下はわずかなりとも私どもが戦つた苦しみを考えて憐れみを掛けてくださったことがありましたでしょうか。

これは、本シンポジウムの井口千雪氏の発表で引く郭勛の言葉とほとんど同内容といつてよい。『楊家府世代忠勇通俗演義傳』も武人のプロパガンダとしての性格を持っていたのではなからうか。

三、『水滸傳』について

『水滸傳』第七回から第十回において語られる林冲物語は、本来

「小張飛」だったはずの林冲の性格と合致せず、内容的にも他と異なる悲劇性を持ち、文体なども他の部分とは性質を異にする。この点について、発表者は李開先の作とされる戯曲『寶劍記』の原型の成立年代が、序に言う嘉靖二十六年（一五四七）より大幅にさかのぼることを示し、戯曲におけるキヤラクターと設定が『水滸傳』に持ち込まれた可能性を示した。しかし、まだ稿本の段階で存在したのみである『寶劍記』原型がなぜ『水滸傳』に影響しうるのかという点で大きな問題が残っていた。

井口千雪氏の研究により、李開先は郭勛と同時に失脚して官界を去っていること、ともに霍韜らと密接な関係にあり、郭勛の政敵夏言と激しく対立していたことが明らかになった。李開先は失脚前、官界にあった時期の作品を一切残していないため、具体的なことは明らかではないが、李開先、もしくは彼の周辺にあった人物が郭武定本『水滸傳』の成立に関与したとすれば、『寶劍記』が『水滸傳』に影響することへの疑問は解消する。李開先、もしくはその関係者が『水滸傳』成立に関係したのではなからうか。

李開先『詞譜』の次の記述は、嘉靖年間における士大夫の『水滸傳』受容を示す事例として知られる。

崔後渠・熊南沙・唐荊川・王遵巖・陳後岡謂、水滸傳委曲詳盡、血脈貫通、史記而下便是此書。

崔銑・熊過・唐順之・王慎中・陳束は言っていた。『水滸傳』は委曲が尽くされ、一本筋が通っていて、『史記』以後ではこの書ということになる。

ここで列挙されている崔銑（一五七八～一五四一）・熊過（一五〇六～一五八〇）・唐順之（一五〇七～一五六〇）・王慎中（一五

〇九～一五五九）・陳束（一五〇八～一五四〇）のうち、崔銑以外の四人は、李開先とともにいわゆる嘉靖八子に数えられる唐宋派の主要人物であり、しかも李開先・熊過・唐順之・陳束はみな嘉靖八年（一五二九）進士。崔銑も李開先とはごく親しい関係にあった。彼らが『水滸傳』を読んだのは、陳束の没年から考えて、嘉靖十九年（一五四〇）以前だったはず。刊本が大量に出回っていたとは考えにくい当時、彼らはどこから『水滸傳』を入手したのか。

嘉靖年間における『水滸傳』の蔵書記録は次の二種である。

晁璠（一五〇四～一五六〇。嘉靖二十年〔一五四一〕進士）『寶文堂書目』

水滸傳 武定板

高儒『百川書志』

忠義水滸傳一百卷 錢塘施耐菴的本 羅貫中編次……

晁璠が所有していたのは郭武定本であった。では高儒が持っているのはどのようなテキストか。

高儒とは何者であったのか。

高儒の父高榮の墓誌銘「……軍錦衣衛指揮使高公配淑人左氏合葬墓誌銘」には「公諱榮、字邦慶、別號蘭坡、爲順天涿州人。譜牒散失、先世莫徵（公は諱は榮、字は邦慶、別号は蘭坡、順天涿州の人である。家譜が散佚してしまったので、その先祖については知る術がない）」とあり、特別な家の出身ではなかったが、「正徳初、諸父諱鳳者官司禮監見寵（この後缺文）」とあり、缺文の後に「中書舍人」とあることから考えて、宦官高鳳の甥として官職を得たものと思われる、後に錦衣衛指揮になったとある。高儒はその長男で「本衛（錦衣衛）中所副千戸」であった。

また、高儒の伯父高得林の墓誌銘「明故昭勇將軍錦衣衛指揮使高君墓誌銘」には、やはり高鳳の甥として立身し、錦衣衛の長官になったこと、王越（文官でありながら軍功をあげて威寧伯になった人物。宦官との関係で批判された）と関係があったことが記される。この件について、『明史』卷一百八十八「劉瑾傳」には次のようにある。

先是、兵科都給事中艾洪劾中官高鳳姪得林營掌錦衣衛。これより前、兵科都給事中艾洪は、宦官高鳳の甥得林が錦衣衛の長となったことを弾劾した（「營」は「管」の誤りか。『明實録』正徳元年十月癸丑には弾劾の対象が「命管錦衣衛事」とある）。

また高鳳については、『明史』卷一百八十一「劉健傳」に次のように見える。

劉瑾者、東宮舊豎也。與馬永成・谷大用・魏彬・張永・丘聚・高鳳・羅祥等八人俱用事、時謂之「八黨」、日導帝遊戲、詔條率沮格不舉。

劉瑾は、武宗が太子であった時から仕えている宦官である。馬永成・谷大用・魏彬・張永・丘聚・高鳳・羅祥とあわせて八人で権力を握り、当時「八党」と呼ばれた。毎日帝を遊びに誘い、臣下を勤務評定せよという命令もすべて止めてしまつて実行されなかつた。

つまり高儒の父と伯父は、権力を握つた宦官の甥として錦衣衛高官の地位に昇つた人物であつた。そして高得林の墓誌銘の篆額を書いているのは「武定侯鳳陽郭勛」その人である。

井口千雪氏が指摘するように、『百川書志』には他にも郭勛が刊

行した書籍が多く記録されており、ここに記録された『水滸傳』も郭武定本であろうと思われる。つまり郭勛は、関係者に『水滸傳』を配つていたらしい。李開先の仲間が皆『水滸傳』を愛読していたという事実は、彼らが郭武定本を所有していたことを意味するのではないか。それが李開先から出たものだとすれば、李開先が『水滸傳』に関わつていた可能性は高まる。

郭勛の刊行目的は、井口千雪氏の発表の通り、武官の地位向上を狙つたものと思われる。

初期の『水滸傳』読者のうち、唐順之は倭寇討伐などに従事し、武官と密接な関係を持つていた。李開先も軍隊と関わつた経歴がありある。この頃は中砂明德氏がいう「文武のクロスオーバー」が發生した時期である。文官でありながら、直接戦闘に従事して軍功を上げ、文官は得られないはずの爵位を受けた王越と王守仁はその端的な事例である。

この時期には、武人と深く関わる文官と、恩蔭による武人ならざる武官が出現していた。

四、『金瓶梅』について

『金瓶梅』に関わる最も大きな問題は、何のために作られたのか、なぜ『水滸傳』に依拠して、いわばパラレルワールドともいうべき体裁を取つているのかという点にある。

主人公西門慶は、『水滸傳』で生菓屋の状態で殺されるのとは異なり、蔡京に貢いだ結果、武官になる。彼の肩書きは「金吾衛衣左

所副千戸、山東等處提刑所理刑」という現実にはありえないものだが、彼が錦衣衛高官であることは随処で示されており、山東清河を舞台とするといいつつ、実際には北京の状況を描いているものと思われる。^(三)そしてここでは、武官と宦官や一部の文官が結託して、権勢をほしいままにする様が、非常にリアルに描写される。例えば、詞話本第七十回から登場する高級武官何千戸（名は永壽）は「何太監の姪兒」、つまり、まさに高儒一家と同じ身の上である。李瓶兒の前夫花子虚も花太監の姪兒である。

『金瓶梅』の内容は、武官の悪行を赤裸々に暴露するものである。また、荒木猛氏が指摘するように、『金瓶梅』には正徳・嘉靖期に実在した人物と同名の人物が多数登場する。^(四)荒木氏は、嘉靖二十六年（一五四七）の進士である狄斯彬・凌雲翼・曹禾（この年の進士には王世貞・張居正・汪道昆がいる）のほか、多数の名をあげているが、それ以外にもこの時期の実在人物と同名の例は多い（進士のみに二十名ほど）。特に注目されるのは次の事例である。

西門慶の正妻呉月娘の兄呉千戸は本名を呉鏗という（詞話本第六十四回）。同名の人物が当時実在し（正徳九年進士）、しかも出身地は山東陽穀、つまり『金瓶梅』における武松と西門慶・潘金蓮の物語の舞台である。中国に同姓同名は多いが、これは偶然とは考えにくい。当時の人物をさまざまな役割で登場させることにより、何らかの効果を期待したのではないか。

武人の立場を主張して文官を批判する『水滸傳』に対し、『金瓶梅』は武官・宦官・一部の文官（これが明代における多くの大規模軍事行動において司令部を構成するメンバーであった）が結託して不正を働く様を暴露的に描く。現実世界において、『寶劍記』のオ

リジナル創作に関与した劉澄甫は、軍事行動にあたり、宦官張忠と高級武官劉暉のために、紀功御史として功績をでっちあげて山西右参議の地位に就き、間もなく弾劾されて免職された人物であった。彼は内閣大学士劉珣の孫で、その家は山東の大族であった。

『金瓶梅』は『水滸傳』に対するカウンターアタックとして作られたのではないか。

五、『金瓶梅』『元曲選』と武官

刊行以前に『金瓶梅』テキストを所有していた人物の一人は湖廣麻城の劉承禧であった。^(五)彼は錦衣衛指揮であり、父の劉守有は、嘉靖年間に辺境で功をあげた祖父劉天和の恩蔭で錦衣衛の地位を得た（文臣の子孫で武官の地位を受けた初期の例といわれる）。^(六)更に、劉承禧は明の宮廷演劇のテキスト（いわゆる内府本）を多数所有しており、臧懋循は彼から借覧したこのテキストを利用して『元曲選』を編纂した。

つまり、やはり錦衣衛高官だった『百川書志』の高儒同様、劉承禧も白話文学のテキストを数多く所蔵していた。武官と白話文学の関係の密接さ、そしてその流布に当たって彼らが重要な役割を果たしたことはここからも見て取れる。更に、劉守有は萬曆十一年（一五八三）の武進士であり、同年の文進士である湯顯祖とは親しい交流があった。また、麻城に居住していた李卓吾とも関係があり、劉承禧は袁宏道と関わりを持ち、また嘉靖末期の大政治家徐階の娘婿であった。

つまり、高級武官は高級知識人たちとも密接な交流を持ち、相互に影響し合っていた。

また、明末清初の大劇作家李玉の戯曲『兩須眉』には、劉承禧の従弟とおぼしき劉僑（劇中では劉喬）が、史実とは全く異なる高潔な人物として登場する。更に李玉の代表作『一捧雪』の主人公莫懷古・莫昊父子は王忬・王世貞父子をモデルとし、敵高・嚴世番父子を敵役に据えるが、武将戚繼光と錦衣衛長官陸炳（『明史』では「倭倖傳」に収められる）は正義の人として登場する。ここからも、白話文学の世界では、武官は肯定的にとらえられることが多いことが分かる。

以上のように、不特定多数を対象とする近代的な文学が生まれるにあたり、武官・武人は、読者として、更には制作者・刊行者として、非常に重要な役割を果たしていた。彼らは、近い立場にある知識人とともに、従来とは異なった価値基準に基づく、異なった性格の文学作品を生み出し、マスメディアという新しい媒体を通して自らの立場を主張していった。ここでは、これまで文学作品の題材として取り上げられることのなかった人々が描かれ、新しい読者がその読み手として出現する。この視点から文学史を見直す時、新たな地平が開けるはずである。

《注》

- (一) 金文京「『戲』考—中国における藝能と軍隊」(『未名』8〔一九九一年八月〕)。
 (二) 小松謙「武人のための文学—楊家将物語考」(『阿頼耶順宏・伊原澤周両先生退休記念論集 アジアの歴史と文化』〔汲古書院、一九九七〕)。

後に『中国歴史小説研究』第六章)。

- (三) 井上進『明清學術變遷史』(平凡社、二〇一一)第二章「明代前半期の出版と學術」六五〜六七頁。
 (四) 小松『中国白話文學研究—演劇と小説の関わりから』(汲古書院、二〇一六)第一章「元代に何が起こったのか」。
 (五) この点については、松浦智子「時事小説『征播奏捷伝通俗演義』の成立とその背景—もう一つの「楊家将」物語」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要』・第2分冊 五十三〔二〇〇八年二月〕)で言及されている。
 (六) 小松『寶劍記』と『水滸傳』—林冲物語の成立について(『京都府立大学学術報告人文』第六十二号〔二〇一〇年十二月〕)。後に『中国白話文学研究—演劇と小説の関わりから』第六章)。
 (七) 以下、「詞話」の記事に見える名前と高儒の素性については、井口千雪「武定侯郭勛の人脈—その文学活動を支えたもの—(後篇)」(『和漢語文研究』第十六号〔二〇一八年十一月〕)で詳しく論じている。
 (八) この二種については井口千雪『三國志演義成立史の研究』二九〜三二頁参照。
 (九) 高儒の素性についても、井口(七)所引論文で詳しく論じており、この記述は同論文の内容に基づく。
 (一〇) 『新中国出土墓誌 北京〔壹〕』(中国文物研究所編、文物出版社、二〇〇三)。
 (一一) 井口前掲書二九・三七・五一頁。
 (一二) 中砂明德『江南 中国文雅の源流』(講談社選書メチエ、二〇〇二)第四章「北虜南倭」「文武のクロスオーバー」。
 (一三) 荒木猛「金瓶梅」における諷刺—西門慶の官職から見た—(『函館大学論究』第十八輯〔一九八五年五月〕、後に『金瓶梅研究』(思文閣出版、二〇〇九)第三部第四章)、小松『金瓶梅』成立と流布の背

- 景」(『和漢語文研究』創刊号(二〇〇三年十一月)、後に『四大奇書』の研究』(汲古書院、二〇一〇)第四部第二章)。
- (二四) 荒木猛 「金瓶梅に描かれた役人世界とその時代」(『活水日文』第二十二号(一九九一年三月)、後に『金瓶梅研究』第三部第三章)。
- (二五) 沈徳符『萬曆野獲編』卷二十五「金瓶梅」。以下の記述については、小松『金瓶梅』成立と流布の背景」参照。
- (二六)『明史』卷九十五「刑法志三」。